

無力な人の力

—暴力の時代におけるジョルジュ・ルオーの再解釈—

高橋 在也（千葉大学大学院看護学研究科）

ジョルジュ・ルオーは、前半生には娼婦や道化師を「醜悪」に描く画風ゆえに「闇の画家」と評され、その後半生においてイエスの人生を題材に暖かく明るい画風へと変化していったという評価が定着している。こうした画風の変化の契機として、詩人アンドレ・シュアレスとの往復書簡が指摘されている。ルオーはシュアレスに宛てた最初期の書簡において、「私は心の奥に苦悩と限りない憂愁を抱えています。もし神の許しがあるならば、私の絵は、この苦悩や憂愁の表現として不完全ながらも開花するでしょう」と打ち明けるが、それに対してシュアレスは、都会の過酷さが君に絶望の精神を植え付けたとしてもその絶望の表現が君の生来の使命ではない、芸術家とは、苦悩の世界に愛の最も美しい形を与えることでその世界を救うものだ、と応える。こうしたやりとりが、表現者にとって重みを持つ救いであつたらうとは推測される。問題は、シュアレスが同じ書簡の中で、次のように書いていることである。「私たちが芸術家であればあるほど、私たちは、悪の恐ろしさそのもので美を創らなければならない。」この意味は単純には理解ができない。

悪とは何かという問題の現代的意味を考えるためには、シモーヌ・ヴェイユの定義が示唆的である。ヴェイユによると、「悪」とは、暴力を振るわれ心が傷つけられた後にその傷が回復せず、癒えぬ傷が膿んで、他者や物に暴力を再びぶつけることで増殖していくものとされる。ヴェイユは同時に、そうした不条理や傷を他者や物にぶつけないことによって、それが「苦しみ」に変わるが「悪」を生まないとも述べている。ヴェイユの「悪」の概念は、いじめに代表される暴力の連鎖のメカニズムを言い当てつつも、その連鎖を防ぐために、完全に孤独な状況においても可能なひとつの手だてを示唆している。それは、自らの中で被った傷に耐え、それを「苦しみ」に変えるということである。暴力の被害者には助けが必要である。しかし、「助け」がないことこそ、暴力被害の深刻さの中核ともいえる。苦しみに耐えることは、悪を増殖しない代わりに、現実的には文字通りの苦痛であり、無力である。しかしながら、苦しみに耐えた経験は副産物を生む。それは、苦しんでいる人がいかに孤独の中で苦痛と無力に耐えているかを理解できる（今苦しんでいる人にとっての）他者になれる、というかけがえのない価値である。最も無力な人こそ、最も無力な人の理解者になる力をもつ。ルオーの描くイエスはそのような人物であり、かつ、そうした人物が描かれた絵画作品そのものが、イエスと同じように無力な人にとってのまるで理解者であるような力をもつ。本稿ではシュアレスの言説を、悪を苦しみに変えることで美を創造すべきだ、と解釈し、その美をこのような力だと定義する。ここから、シュアレスの言説における、またルオーの作品に見て取れる美とは、それ自ら人に近づき、弱さや傷つきに寄り添うものであるという定義が導かれる。